民報サロン

電影人間の誕生

藤森　弘

テレビとは、何だろう―。

改めて考えてみると、不思議なことばかりだ。スイッチを押すと、電子の光が過去の歴史的事実や未来の予想図を映し出す。ニュース番組では毎日、日本や世界各地の風物や出来事が電子信号に変換されて茶の間に運ばれてくる。時には、怪獣や妖精など空想の世界の生き物たちがアニメになって生命を与えられる。

そう、テレビは変幻自在な〝電子の玉手箱〟だ。私たちをしがらみの多い日常世界から解き放ち、異次元の夢の世界へと連れ出してくれる。この世には存在しない世界を、テレビでは容易に創造することができるのだ。

そうやって考えてみると、私たちの日常的な「現実」感覚が、テレビの登場によって、大きく変容させられていることに気づく。いわゆる「現実」は、テレビがあって、それを見ている自分がいる、という構図だけだ。が、自分の意識は身体から遊離して、電子映像が紡ぐ〝もう一つの現実〟の世界で遊び始める。アニメの世界で怪獣と闘う戦士に同化したり、ラブストーリーの主人公と同じ気持ちになったりもする。テレビを見ている間は、絵空事のような映像が現実味を帯びる。私たちは、電子映像の「影」を本物以上にリアルに感じている。そんな世界に生きる人間たちを、私は「電影人間」と名づけたいと思う。

「電影人間」には、二つの大きな特徴がある。第一の特徴は、「等価性の宇宙」に生き、「流体意識」を持った点だ。悲惨な戦争シーンも、お笑いタレントのばか話も、短いコマーシャルも、みんな同一次元のテレビ画面に投影される。あるのは映像の断片の連鎖だ。断片と断片は等価に併置される。血なまぐさい映像も、続いて流されるユニークなCMで中和されてしまう。だから、どんなに陰惨な人間の行為も、自分の生きている世界とは無関係だと錯覚してしまう性向がある。湾岸戦争がどこか映画のシーンのように思えたのは、私たちが「等価性の宇宙」に慣らされ、断片的な映像を次々に消費して忘却してしまう「流体意識」に支配されていたからかもしれない。

第二の特徴は、虚実の境界があいまいになり、「虚体感覚」を持った点だ。

戦時中は「鬼畜」のように信じ込まされていたアメリカやロシアの大統領も、テレビ映像によってすっかり親しみの持てる顔になった。この顔は映像である限り虚像なのだが、「現実」に存在する。また、ドラマで演じる俳優の顔やアニメの主人公の顔は、突き詰めると虚像であることは間違いないが、それは〝もう一つの現実〟だ。結果的に、テレビの世界は虚実ないまぜの世界となる。死者の顔がビデオテープで再生されることは日常茶飯事だ。生と死の境界が揺らぎ、国籍や民族の差異もあいまいになった。

虚実ないまぜの世界で、等価な映像の断片の連鎖を生きている私たちは、「虚体感覚」と「流体意識」を身につけるようになったといえる。国境を超えた映像を通じて相互理解が深まり、新しい国際感覚が芽生えた一方で、生死すら虚実ないまぜにされるので、どこか生命感覚が希薄になりつつあるのも事実だろう。

テレビの登場が人類史に何をもたらすのかは未知数だが、「電影人間」の誕生は歴史に対して両義的であるようだ。もしかしたら、「電影人間」の誕生は、戦争とはまったく無縁な新人類の誕生なのかもしれない。

テレビとは何か―。現代社会を読み解くうえで、不可欠な「問い」だと思う。

（昭和村喰丸・フリーライター）